◆From the Field ── 研究の現場から

問いは15歳から始まった
── 暴力・資本主義・技術をめぐる研究の歩み ──

田島　樹里奈

私はもともと、哲学を学びたいと思っていたわけではなかった。日常の中で生じた疑問の答えを探すうちに、哲学や思想の書物へと導かれてきたという方が正確だと思う。

最初の契機は、15歳になったばかりの時に観たアイルランド出身のロックバンドU2の映像作品『Rattle and Hum』（1988）であった。終盤に収録された「Sunday Bloody Sunday」のライブ映像で、ボーカルのボノは、子どもたちの目の前で親が銃撃される現実や、メディア報道の在り方を問い、いつまで戦いを続けるのかと、繰り返される暴力を拒絶する言葉を叫んでいた。その姿に強い衝撃を受けた私は、なぜ人々は平和を口にしながら宗教や民族、国家をめぐって争うのかを知りたいと思い、近所の図書館で北アイルランド紛争に関する本を読み始めた。テロリズムとは何か。国家や警察による行為は、なぜ必ずしも「暴力」と呼ばれないのか。宗教や民族の違いは、なぜ人間を分断するのか。こうした問いが、その後の研究の原点となった。

大学在学中の2001年には、研修のためボストンに滞在し、到着直後にアメリカ同時多発テロに遭遇した。街には星条旗があふれ、厳重な警戒体制が敷かれたが、私の記憶に最も残ったのは、テロの恐怖よりも、むしろ人々が涙を流しながらしきりに神に祈る姿だった。当時、世界唯一の超大国と言われていたアメリカは、10代の私にとって華やかなイメージだった。その人々が、危機の中で神に救いを求める姿を目にして以降、信仰が個人の内面だけでなく、共同体や政治、経済に及ぼす力について考えるようになった。その後、マックス・ヴェーバーのプロテスタント論[1]を読み、宗教的な倫理や生活態度が経済活動や社会制度の形成と結びつくという議論に出会った。漠然と抱いていた疑問が歴史的・社会的な問題として説明されていることに驚き、思想書を読む面白さを初めて知った。

大学卒業後は、事情により急遽就職し、商品先物取引会社に勤務した。そこでは、利益、投機、市場、貨幣が人間の判断や欲望を左右し、人の心までを変えていく現実を目の当たりにした。「資本主義とは何か」「貨幣とは何か」「信じるとはどういうことか」など、新たな問いが次々に生まれ、その答えを探す中で、ジャン・ボードリヤールの消費社会論[2]に出会った。市場は単に商品を交換する場所ではなく、記号やイメージ、欲望が生産され消費される空間でもあるという指摘は、私が経験した現実を別の角度から捉え直す手がかりとなった。

いま振り返ると、私の研究の出発点には、いつも現実の出来事があった。そこで覚えた違和感や疑問を掘り下げるうちに、私は次第に、それらを生み出す制度や社会の構造そのものを考えるようになった。やがて大学院へ進学した私は、15歳の頃から関心を持ち続けてきた北アイルランド紛争を本格的な研究対象とした。特に、暴力の記憶が壁画や映像などのメディアを通じてどのように表象され、共同体の政治的アイデンティティを形成するのかを考察した。2011年にはベルファストとデリーを訪れ、壁画やThe Museum of Free Derryの展示に触れた。現地で撮影した壁画の写真を資料として用い、その政治性と表象の問題を考察した成果は共著[3]や学会でも発表した。

北アイルランド研究を進める中で、暴力は戦争やテロのような例外的事件として生じるだけでなく、国家、制度、経済、メディアの構造にも組み込まれているのではないかと考えるようになった。この問題意識から、博士課程ではジャック・デリダを中心に、主権、排除、自己免疫、表象をめぐる研究へ進み、博士論文および単著[4]では、死と暴力の問題を政治・倫理・メディアの交差する地点から考察した。

その後、私の関心は、技術や知識が人間の世界理解と社会の構造をいかに変えるのかという問題へと広がった。技術・情報社会における感性の変容を考察するとともに、現在は、日本近代思想を代表する哲学者の一人である田辺元が、相対性理論、量子論、近代数学の変革にどのように応答し、科学的認識と人間の実践との関係を捉え直そうとしたのかを研究している。これは近代科学の変革を、人間の世界理解を揺さぶる文明的な出来事として読み直す試みである。

現在、本務校の短大では「交通倫理学」という科目を担当し、公共交通を手がかりに、自己決定と公共の福祉、安全と自由、事故やリスクに対する組織責任、技術と人間の関係などを考察している。交通は現代文明を支える基盤であると同時に、個人の自由と社会全体の安全、利便性と監視、技術革新と責任が交差する公共空間でもある。そこに生じる具体的な問題から、現代社会の制度と倫理を問い直すことが、現在のもう一つの研究課題である。

北アイルランド紛争、資本主義、技術、交通、科学哲学など、私の研究対象は、一見すると互いに関連のないテーマに見える。しかし私の中では、制度、技術、知識、宗教、表象が、人間の行動や社会のあり方をどのように形づくり、文明の形成と変容にいかに関わってきたのかという問いによって結ばれている。私にとって哲学は、初めから学問上の目的として選び取ったものではない。現実社会の中で生じた疑問を言葉にし、その背後にある制度や価値観を問い直そうとするたびに必要となり、いつしか手放すことのできない思考の方法となったものである。

人間はなぜこのような社会をつくるのか ── 人間はなぜ他者を傷つけるのか。平和に暮らすことがなぜこれほどまでに難しいのか。他者と共に生きるためには、どのような制度、技術、倫理が必要なのか。振り返れば、私は15歳の頃から、形を変えながら一つの問いを追い続けてきたのだと思う。

（東京交通短期大学）

1　マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄 訳、岩波書店、1989年。
2　ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司、塚原史 訳、紀伊國屋書店、1995年。
3　田島樹里奈「アートのポリティックス ── 北アイルランドにおける壁画の脱構築的読解」『国際文化研究への道』所収、彩流社、2013年。
4　田島樹里奈『デリダのポリティカル・エコノミー ── パレルゴン・自己免疫・暴力』北樹出版、2019年。